

よきカルヴィニストのラブレー —「野性の身体」と「カーニヴァルの言語」—

渡辺 優

0. 本論のねらい——近代初期フランス宗教史におけるレリ

16世紀後半から17世紀にかけてのフランスは、宗教改革と宗教戦争、「新世界」アメリカ大陸への進出、あるいは「習俗の文明化」とも表現される心性の変容などを契機として、内外における「自己」と「他者」との区別の出現ないし創出を経験したと考えられる。それはまた、中世的キリスト教世界との様々な水準における歴史的断絶の経験でもあったといえるだろう。本論文で扱うジャン・ド・レリ(1534-1613)は、カルヴァン派牧師として、あるいは「民族学者」の先駆⁽¹⁾としてこの転換期のただ中を生きた人間であるが、そうであるがゆえに彼のテキストにはさまざまな不整合、興味深い混乱と矛盾がみられる。

レリが後世に遺した著作は、宗教戦争下の極限的な体験を綴った『サンセール市の忘れえぬ事ども⁽²⁾』(1574、以下『サンセール』)と、約一年のブラジル滞在に関する『ブラジル旅行記⁽³⁾』(初版1578、以下『旅行記』)の二つである。とりわけ後者『旅行記』における「野性人Savage⁽⁴⁾」に関する記述は、その後の西欧思想史にも少なからぬ影響を与えたとされる⁽⁵⁾。本論文は、「野性人」のイメージをめぐる錯綜する「カルヴィニスト」としての自己と他者との関係を、「身体」に関する言語・文体を中心に検討する。

以下、議論の大まかな流れを述べておく。まず、本邦におけるレリ研究が皆無であることにも鑑み、レリと二つのテキストの成立の背景について基本的な事柄を確認する。次に、先行研究における基本的なレリ理解に相矛盾する観点がみられることを示すが、本論文はそうした矛盾の根拠をレリその人の内に認めるべきだと考える。ここで本論文は、ミハイル・バフチンのラブレー論およびルネサンス言語文化論に接続する。

その上で本論は、レリが自らの他者経験を「書く」際に用いている言語体系・イメージの源泉を次の二つの極に見出していく。すなわち、一方の極にはジャン・カルヴァン(1509-1564)によって創設された改革派教会のドグマ(カルヴィニズム)が、他方の極には「世界文学のすべての作家のうちで最もカーニヴァル的な作家⁽⁶⁾」フランソワ・ラブレー(1494?-1553)の「カーニヴァルの言語」が、それぞれ認められる。野性人の祝祭的身体をめぐるレリのテキストを、このように設定された座標軸においてみることで、それが孕んでいるねじれや緊張を同時代的な現象として取り出してみたい。

1-1. ジャン・ド・レリと二つのテキスト

ジャン・ド・レリは1534年、フランスの中部ブルゴーニュ地方の、セーヌ川の源に近い小村に生まれた⁷⁾。靴職人の家の出自で、早くから改革派への共感を示していたらしいが、幼少期について詳しいことはわかっていない。しかし1556年の時点でカルヴァンが神政を固めつつあったジュネーヴに住み、そこで神学を学んでいたということは確かである。

当時、フランスは第三回の植民地計画（ブラジル・リオデジャネイロとその周辺。1555-1560年）を開始していた。現地の植民地提督ニコラ・デュラン・ド・ヴィルガニオン⁸⁾は、植民者たちの規律の乱れから精神的指導者の助力を必要とし、かつて彼の学友であり、いまはフランス改革派教会の指導者となったカルヴァンに人的援助を要請した。これを受けたジュネーヴ教会がブラジルへの派遣団を募集したところ、結局いずれもフランスからの亡命者であった14人の改革派信徒が応募した。その一人が当時22ないし23歳のレリであった。一行は1556年11月にオンフルールから出航、翌年3月からヴィルガニオンの指揮下に入ったが、聖餐をめぐる意見の相違から対立を見、1557年10月末にコロニーを去る。以後三ヶ月の間、レリ一行は現地民トゥピナンバウ族の間に滞在することとなった⁹⁾。レリのブラジル体験はこの期間に凝縮されている。帰国の船に乗ったのは1558年1月初旬である。航海中の嵐や壮絶な飢えにより幾度も死の危険に瀕しながら、ついにフランスの土を踏んだのは同年の5月も末のことであった。

帰国後、1560年にジュネーヴの市民権を獲得、カルヴァン派教会の牧師となったレリは、誕生期の教会指導者としてフランス各地を転々とするが、それは8回にわたる宗教戦争が荒れ狂う困難な時代であった。1572年8月23日夜から翌日にかけて、「聖バルテルミの大虐殺」がパリで勃発する。レリの尊敬するユグノの指導者ガスパール・ド・コリニー¹⁰⁾も暗殺され、死体は街路を引き回された。虐殺はただちにフランス全土に波及する。当時のレリの任地ラ・シャリテも例外ではなく、レリは翌日サンセールに脱出することを余儀なくされた。だがここもまたカトリック側軍隊の包囲を受け、翌73年1月から8月の降伏・落城に至るまで、レリは8ヶ月の壮絶な籠城生活を経験することになる。このときの攻囲戦の様相をまとめたものが『サンセール』であり、同市脱出後、1574年に出版された¹¹⁾。

なお、『旅行記』の初版が陽の目をみたのは帰国後実に20年の歳月が流れた1578年であったこと、つまり『サンセール』出版の5年後のことであったということに注意したい。原稿は1563年にはかなり仕上がっていたが、改革派に対する弾圧に伴う混乱を背景に紛失の憂き目に会い、さらにもう一度仕上げなおした原稿も再度失われてしまったという¹²⁾。幸いにして最初の原稿がレリの手元に戻されることになるが、それは1576年のことであった。つまり『旅行記』には、図らずも生じた20年のタイムラグによって、宗教戦争の影が落ちる結果となったことが推測できるのである。事実、『旅行記』の端々に、カトリックという「他者」とカルヴィニストとしての「自己」との差異をめぐる鋭利な意識の現れをみてとることができるということを指摘しておきたい。

壮年期の大半をフランスにおける新教会の樹立と指導に捧げたレリは、国王アンリ三世が暗殺された1589年、国内の改革派弾圧がいよいよ激しくなるに伴ってスイスのベルンへ移っている。晩年の彼についてはわからないことが多い。1613年にペストで命を落とすまで、ロザンヌ周辺で教会活動に従事しつつ、おそらくは『ブラジル旅行記』の加筆と改版に日々を過ごしていたもの

と推測される⁽¹³⁾。

1-2. 先行研究の整理からみえるもの——ラブレーの影

先行するレリ研究を概観すると、基本的なレリ像の理解をめぐってかなり極端な見解の違いが存在することに気づく。それは外世界と他者に対するレリの態度の解釈をめぐりものである。すなわち、そこにルネサンス・ユマニズムの自然主義や「寛容」の精神を見出す者がいるかと思えば、神の絶対的超越性と人間の墮落した本性を強調する正統カルヴィニズムのドグマ的峻厳さを見出す者もいるのである。

前者の観点に立つ者は、モンテーニュやラブレーに代表されるフランス・ユマニズムの潮流にレリを位置づけ、教条主義に囚われることのない個人としての柔軟さ、快活で楽観的なレリの人間観を強調する⁽¹⁴⁾。ところが後者の観点に立つ者は、レリの人間観の根本に、カルヴァンが超越神に絶対的権威を認めるに反比例して生み出した陰鬱な人間観を据える⁽¹⁵⁾。レリ研究の第一人者フランク・レストランガンもまた、しばしばレリの二面性に言及しながらも⁽¹⁶⁾、結局のところ予定説を基盤とするカルヴァンのペシミズムを見出すという基本的観点をその最初期の研究から一貫してもち続けている⁽¹⁷⁾。

こうした解釈の食い違いの原因はどこにあるのか。結論から言えば、複数の解釈の存在はレリのテキストそのものに内在する複数性を反映している、と本論は考える。そしてレリのテキストにみられる異質な要素間の緊張関係を前景化しようとするとき、このカルヴィニストのテキストにラブレーの影が遍在しているということに注目したい。

レリのテキストにラブレーの影響が浸潤していることについては、レストランガンの研究も含めすでに多くの指摘がある⁽¹⁸⁾。しかし、これについての最も確とと思われる指摘は、『旅行記』ファクシミリ版に付された編者ジャン=クロード・モリゾの序文に見出せる。彼は、新世界についてのレリの語りが「パンタグリユエリスム」に結びついている、と述べている⁽¹⁹⁾。パンタグリユエリスムとは、言うまでもなくラブレーが『パンタグリユエル物語』で開陳せんとした精神態度であるが、エーリッヒ・アウエルバッハの言葉に倣えば「人生を一握りに掴むことであり、精神的なものと感覚的なものを一時に把握し、人生が提供する可能性を何一つ逃さないこと」である⁽²⁰⁾。つまり、肉体的存在である人間のあらゆる生の可能性を隅々まで捉え、肯定し、あるいはそれと戯れようとするリアリズムの精神である。

さらにモリゾは、レリの『旅行記』には「広範かつ多様な文化が取り込まれた⁽²¹⁾」ということを強調している。『旅行記』は「見事な混合物 (heureux alliage)⁽²²⁾」である。そしてそれはまた多様な「文体」の混合物でもある。「極めて多様である彼の文体は、詩篇の調べから陽気なあけすけ話へ、諷刺攻撃文書から親密な打ち明け話へ、悪ふざけから……叙情詩的な高揚へと移行行く⁽²³⁾」。モリゾはレリの内に親カルヴァン的な態度と親ラブレー的な態度を同時に認めている。

文体およびその背後にある精神態度の多様性を指摘するモリゾの議論を経て、本論はミハエル・バフチンのラブレー論に接続する。中世・ルネサンスの民衆のカーニヴァルに陽気な祝祭と笑いの文化の典型を見出し、彼がその最高の継承者と認めるラブレーの文学空間を舞台に、「カーニヴァル的なもの」の解放的な力の特性を縦横に論じたバフチンは、「ルネサンス」という時

代が孕んでいた内的な緊張状態の源泉を「物質的・肉体的原理について、二通りの相矛盾した認知の仕方が不整合になっていること」に認めていた。

ルネサンスのリアリズムの複雑性は今に至るまで、まだ十分に解明されてはいない。世界概念の比喩的表現の二つのタイプがここでは交錯している。一方の概念は民衆の笑いの文化へとさかのぼるのであるが、他方は、既成の分断された日常生活のブルジョワ本来の概念なのである。ルネサンス・リアリズムの特徴は、物質的・肉体的原理について、二通りの相矛盾した認知の仕方が不整合になっていることである。成長し、つきることなく、ほろびることなく、流れ行く物質的な生の原理、永遠に笑い、すべて〈奪冠〉し、改新する原理が、階級社会の風俗の中で矮小化され沈滞した《物質的原理》なるものと、矛盾した形で結合されているのである。⁽²⁴⁾

ラブレール論の最終章では、ルネサンスの「文学的・言語的意識」が「言語、方言、訛、隠語の境界のいかに複雑な交差の中で」形成されてきたかが論じられている。最終的にバフチンは次のように結論する。

言語、方言の素朴な、ぼんやりした共存は終わった。そして文学的・言語的意識は、単一の確実な言語の強固な体系の中に生れたのではなく、多くの言語の境界で、緊張せる相互方向標定と戦いの地点で生れたのである。言語——これは世界観である。それも抽象的ではなく、具体的、社会的で、価値評価体系がここには浸透している。言語は日常生活の営みや階級闘争とも切り離すことはできない。それゆえ、どの対象物も、どの観念、どの観点、どの価値評価、どの抑揚も、言語＝世界観の境界の交差する点に現われ、緊張したイデオロギー闘争に引き入れられたのである。⁽²⁵⁾

バフチンが一貫して主張しているのは、複数言語環境 (heteroglossia) と呼ばれる、異質な言語や世界観の緊張した対話状況である。そしてバフチンのこの対話的なモデルは、狭義のラブレール研究の範疇を越えて、近世フランスの文化的ダイナミズムを理解するための歴史的視点を提示しているのである。

以下では、レリにおいてまさしく異質な言語＝世界観の境界の交差がみられるということを示したい。詰まるところそれは、バフチンによれば「笑いを知らぬカルヴァン⁽²⁶⁾」の教条的言語とラブレールの「民衆の笑いの文化の言語」とを二極とする、二つの言語＝世界観の闘争として描かれることになる。

2-1. カルヴィニストのラブレール

レリは『旅行記』の二箇所においてラブレールの物語を引いている。第一の箇所は「カニバリズム」について記された第15章にある〔HV: 364-365; 228-229〕。ここでレリは、トルコ人に脂身を巻かれて串刺しにされ、半焼きにされたところを逃げ出したというパニユルジュの荒唐無稽な話

⁽²⁷⁾を引きつつ、野性人の人肉食のやり方に関する先人の誤解をグロテスクかつコミカルな語り口で揶揄しているのだが、まさしく二宮が指摘する通り「レリはカルヴァン派牧師として建前上評価するわけにはゆかなかつたろうが、しかしラブレーの一エピソードを引くほど愛読していたらしいのは興味深い⁽²⁸⁾」。というのも、カルヴァンとラブレーは当初は同じ福音主義者として出発しながら、すでに1540年代にはその思想と文体を全く異にする敵同士となっていたからである⁽²⁹⁾。ラブレーはカルヴァンを「ジュネーヴの詐欺師」と揶揄し、カルヴァンはラブレーを「神の尊厳に向かって、汚物を吐きかけ、宗教を悉く汚そうとする犬ども」の一人に数えるなど、両者の間にはいささかの融和の余地もなかったのだ⁽³⁰⁾。

事実、以下に引用する第二の箇所では、ラブレーへの敵対的姿勢が明白に示されている。それはブラジルを離れフランスへの帰路に付いたレリたちの様子を語った第21章にある。レリは海上で幾度も九死に一生を得るような危険に曝されていた。

まったく私にははっきりとわかっているが、陸の上で、食卓を前にして、海を行く者がしばしば見舞われる難船だの危険だのを、茶化してみたり馬鹿にしたりするのが慣わしとなっているラブレー主義者、あの神を鼻先で笑い侮る連中が、もしもあの現場に居合わせたならば、彼らの冗談は恐るべき大恐慌に変わってしまったに違いない。同様にこの話（やその他われわれがこの航海で経験した危険、もう言及したのやこれから言及するその話）の読者の多くが、諺どおりにこうおっしゃるといふことも、私はまったく疑わない、「いやあ、キャベツを植えるのは楽しいこった。海だの難破だのは、現場へ行ってみるよりも、話を聞くほうがずっとましだわい。ディオゲネス⁽³¹⁾という人は賢明な人だなあ、航海をしようと思ったくせに実際は航海をしなかった人びとを賞めたんだからなあ」と⁽³²⁾。〔HV: 520-521; 318〕

ここでは「ラブレー主義者⁽³³⁾」が「神を鼻先で笑い侮る連中」と弾劾されている。だが、表向きの批判にも関わらず、どことなくコミカルな「文体」にラブレーとの近さを読みとることは可能だろう。航海の苦難に直面しているはずながら、文体が開放的な雰囲気を作り出している。それは明晰と秩序を旨とするカルヴァンの文体とは一線を画する⁽³⁴⁾。直接名が出なくともラブレーは『旅行記』に遍在している。わけでもトゥピの祝宴を記述した第9章は、次節でみるように、酒と踊りのラブレー的陽気さに満ちているのである。

だが、にも関わらず、レリは最終的にはカルヴィニストとしての自己の立場をけっして譲っていない、と言わなければならない。上の引用の最後の一文、「ディオゲネス～」以下は、ラブレーの原テキストにはなく、また『旅行記』初版にもなかった。これは第二版で加筆されたのである。ところでこの犬儒派の哲人がレリによってどのように語られていたかといえ、ば、「人目のあるところで妻たちと戯れるようなことは絶対にない」〔HV: 436; 270〕野性人に比べて、はるかに下賤な好色漢、唾棄すべき人物として語られていたのだった。

あの下賤な犬儒派の哲人……は独鈷加持の現場を人に見られたが、恥入るどころか今人間を植えているところだと言ったという。また、昨今こちらで見かける穢らわしい背徳漢どもは、淫行を犯すのに人目を忍ぼうともしないが、かかる徒輩は野性人とは比較もできない恥知ら

ずと言うべきである。[HV: 436-437: 270]

「ラブレー主義者」と「ディオゲネス」の結びつきは、レリとラブレーとの間に決定的な溝を穿つものである。『旅行記』は増補改訂の過程で宗教論争の書としての色合いを濃くしていった⁽³⁵⁾。これはそうした過程における一つの大きな変化であり、第三版（1585）以降に続く変化の徴候なのである。

直接名が出なくともラブレーの影は『旅行記』のあちこちに見出せるが、このことは以上見てきたような緊張関係がテキストに遍在しているということの意味する。わけても野性人の祝宴を記述する第9章は、酒と踊りのカーニヴァルの陽気さに満ちているが、だからこそレリのテキストを貫く緊張関係を先鋭化されたかたちで取り出すことができるといえる。次節では、野性人のイメージをめぐる錯綜する「カルヴィニスト」としての自己と他者との関係を、彼らの身体を表象する言語・文体に注目しつつ検討する。

2-2. 野性の身体をめぐる闘争——『旅行記』第9章より

はじめに、野性人がいかにすさまじい「飲みっぷり」を見せるかということについて語らんとする、レリのリズム感に溢れた前口上を取り上げよう。

だが飲む話に入る前にその前触れとして、（もっともこう言ったからといってこの悪徳を是認するものではないが）こちら側の酒豪連中、ドイツ人やフランドル人やドイツ傭兵やスイス傭兵、その他飲めや歌えやの大乱痴騒ぎを好み飲兵衛を自認する人々すべてに対して、どうか私に一言謂わせていただきたいものだ、「退りおろう！」と。なぜならば、わがアメリカ人諸公がどんな飲みっぷりを見せるかお聞きになれば、諸賢も自ら、これと較べたら飲酒の何たるかを知らぬも同然とお認めになるだろうからだ。然り、この点に関しては諸賢も彼らに対し一籌を輸するとせねばならないのである。[HV: 248-249; 152]

リズムある文体とともに、「わがアメリカ人諸公 (nos Ameriquains)」という表現に注目したい。この表現には、「われわれが今論じている対象としてのアメリカ人」という意味に加え、彼らへの密やかな親近感が、彼らの身体のごとく跳ねるような文体と相俟って表示されている⁽³⁶⁾。この後にも、レリは彼らのことを「わが暢気連飲兵衛諸君 (nos friponniers et galebontemps)」などと呼んでいるし、ブラジルの酒である「カウ＝イン (Caou-in)」をフランス語風にもじって「カウイナージュ (Caouinage)」と造語し「大酒盛り」の意で用いたりしている⁽³⁷⁾。こうなると、「もっともこう言ったからといってこの悪徳を是認するものではないが」という挿入句は、カルヴィニストとしての自己の体面を保つための言い訳めいたものにみえてこないだろうか。

さて、これに続く次の箇所では野性人の酒宴に異教的祝祭のイメージが重ねられている。

泥酔乱酔に関しては彼らを第一人者、最高権威だとする私の言の正しさを証明するものとして、一例を挙げるならば、一回の酒宴に一人で20以上の酒^{カウイン}壺を飲み干す豪の者も、一人

ならずいると私は確信している。だが何にも増して見物なのは、前章で描いたように彼らが羽根飾りで身を装い、そういう身なりで戦争で捕えた捕虜を殺して喰い、その上で古代の異教徒もどきにバックス祭りをやらかす時で、そういう時の彼らのバックスの神官フレートルさながらの酔いっぷりは一見に値する。[HV: 251-252; 154]

「前章で描いたように」とあるが、第8章では野性人の身体がまさにカーニヴァルの形象によって提示されていた⁽³⁸⁾。それがここに呼び込まれているわけだが、度外れの酒宴と、さらにカニバリズムへの言及が手伝って「古代の異教徒もどきのバックス祭り」という他者イメージがはっきりと形成される。

とはいえ「バックス祭り」というイメージも、野性人の祝宴に対する一義的な否定の産物とは言い切れない。レリの語り口はいかにもラブレー的な快活さを示している。レリは「わがアメリカ人諸公」の、飲んで踊って跳ね回る陽気な肉体を逐一活写することで、放縦で過剰な動きに満ちた彼らの身体を楽しんで記述しているようなのだ。

大いに飲むにせよ、余り飲まないにせよ、彼らは沈みこむということがないから、いま述べた酒盛り以外にも毎日のように村中が集まって、踊ったり遊んだりする風習がある。とりわけ結婚適齢期の青年たちは、銘々がアラルウェと呼ばれる例の大きな羽根飾りを腰に結びつけ、時として手にはマラカを持ち、(既述の) 蝸牛の殻みたいな音を立てる乾燥した木の実を脛にくっつけるという出で立ちで、夜な夜な踊ったり跳ねたりしながら戸別訪問をやらかす。[HV: 252-253; 154-155]

レリにとって、飲んでも飲まなくても、昼だろうが夜だろうが、暦に関係なく、毎日踊って歌って遊んでいるブラジル野性人たちは、その存在そのものがカーニヴァル的である。あべこべにも、彼らにとってはカーニヴァルこそ「仕事」であり生活の秩序なのだから。

そんな彼らを「見るにつけ聞くにつけ」、レリは「こちら側」における教区の守護聖人の村祭りグァレ・ド・ラ・フェットと、そこで繰り広げられる仮装行列や異教的ダンスなどの祝祭的な身体イメージが「思い出された」と言う。

彼らが年がら年中こういう仕事に精出しているのを、見るにつけ聞くにつけ、私はこちら側の特定の土地でおグァレ・ド・ラ・フェット 囃子方と呼ばれている連中が思い出されたことであつた。彼らもまた各教区の守護聖人を祝う村祭りなどの折に、阿呆の衣装を着て、手には道化杖、足には小鈴をつけて、ムーア人踊りを踊ったり与太ったりしながら家々や広場を練り歩くのである。

[HV: 253; 155]

守護聖人の祝祭を野性人の身体イメージと重ねてみせるのは、前者の蒙昧を誇張するという否定的な動機のため、とまずは考えられる。しかし、レリが想起する不定形で過剰な動きに満ちたコミカルな身体は、むしろ野性人の酔っぱらって跳ね回る身体の陽気なイメージに力を得て、「カルヴィニスト」の厳粛な自己イメージに挑戦するという結果を招いているようにも思われる。

レリの「他者」——そこには「あちら側」の野性人のイメージと「こちら側」の（民衆的）カトリシズムのイメージとが重なっている——に対する態度を、一義的に判断することは非常に難しい。そこでは互いに矛盾する他者へのまなざしが混淆しているように思われるのである。しかしながらこのことは、とりわけカトリシズムの儀礼的伝統を「最悪の偶像崇拜」と批判した⁽³⁹⁾「よきカルヴィニスト」の、自己アイデンティティの安定性を脅かす危険な事態でもあるのではないか。

果たして、正統派カルヴィニストとしてのレリの顔がはっきりと覗くのはこの直後の箇所である。

だがここで一つご留意願いたいことがある。わが野性人の踊りのすべて、列をなして踊り歩こうと、あるいはまた彼らの宗教に言及する際に述べるが円陣を組んで踊ろうと、既婚の女も未婚の娘も男衆の間に混じるといことは金輪際ないのであり、踊りたければ女だけ別に踊るのだ。〔HV: 253; 155〕

16世紀フランスにおいて階級に関わりなく最も普及していた気晴らしはダンスだったが、風紀の乱れを恐れた教会は一貫して警戒の目を向けており、教会会議のたびに教区司祭が舞踏の場に同席することすら厳禁する有様だった。ましてカルヴァン派の態度はさらに厳しいものだった⁽⁴⁰⁾。『旅行記』の出版年に近い1579年8月のフィジャックの教会会議や、1581年7月のラ・ロシエルの教会会議も、信徒一般に対してダンスを全面的に禁止し、違反者は厳罰に処すと定めている⁽⁴¹⁾。

こうしたことから二宮は「本書執筆当時牧師であったレリが、わざわざ男女が共に踊らないと述べているのは、未開人弁護の意図があつてのことと考えられる」と述べている⁽⁴²⁾。しかしこの二宮の解釈は再検討を要する。なぜなら、レリは野性人ですら男女共に踊ることはしない、ましてキリスト教徒ならばもつてのほかだと言っているのであり、本質的な問題は、このような言い方によって踊る「身体」の放縦なイメージが健全で秩序あるものへと道徳的な整形を施されるということに認められるからだ。1599年の増補第四版では先の引用箇所に続けて次の補足が加筆された。

ジャン・レオンの話では⁽⁴³⁾、アフリカのフェズ王国でも女たちは男たちと別れて踊るという。こういうわけだから、この事に関してキリスト教徒のもっている慎みが野性人やマホメット教徒のそれにも劣るといことは、キリスト教徒にとってまことに恥すべきことである。

〔HV: 253, note4〕

レリは「こちら側」のダンスを排撃せんとするカルヴァン派のドグマに、野性人の踊る身体を回収してしまう。「男と女がいっしょに踊ることはない」というレリの注記は、イメージの重心を具体的な肉体から抽象的な道徳的内容へと移動させてしまうのである。かくして陽気な野性人の肉体はもっぱら否定的なものとなる。

このような変質をもたらすレリの注記が、ここにあることの蓋然性を理解するためには、当時カルヴィニストにとってダンスがいかに強い禁忌であったかを知っておくべきである。レリと近

しい関係にあったランベール・ダノ⁽⁴⁴⁾は、その著『ダンス反駁論』(1580)の中で正統カルヴァン主義の立場からダンスを論じているが、それはダンスに対する呪詛に近い。なかでも男女が場をともにすることへの非難の調子は極端であり、「悪の極みとは、人々が渾然一体となり、かつ女たちまでもがいっしょに混ざることである⁽⁴⁵⁾」とか「彼らが互いに近寄れば、悪魔が情欲の嵐を巻き起こし、彼らを墮落させ、互いに傷つき合わせることだろう⁽⁴⁶⁾」などと述べられている。ダノはダンスを徹底的に悪魔化してみせる。

神が我々に脚を与えたのは、跳ね回るためではなく、慎み深く歩くためである。みっともなく跳びはねるためではなく、天使たちの集まりに加わるためである。もしもそんなふうには恥知らずに跳ね回って、身体をねじり不恰好な姿をさらすとすれば、そんなとき魂はいっそう醜く、またいっそう下劣になっていることは容易に想像がつくであろう。こうした歌やダンスに合わせて悪魔は踊るのだ。歌やダンスによって悪魔の手下どもは人びとを誑し込むのである。⁽⁴⁷⁾

同時代のカルヴィニストにとってダンスとはかくも激しい嫌悪の対象であり、あるいはそうでなければならなかった。「男と女がいっしょに踊ることはない」というレリの注記は、彼らの歌やダンスに——正統カルヴィニズムの立場からすれば危険なほど——魅せられているように見えるレリ自身にとって必要なものだったのではないか。つまりレリの注記の「意図」は、野性人の弁護というよりむしろ自己の弁護にあった、あるいは危険なほど接近する自己と他者との境界を画定することにあつたと言うのが正確ではないか。ダンスに際して男と女の身体が「混じる」ことへの嫌悪を示して見せるとき、レリは同時に「自己」を「他者」との危うい混淆状態から救い出すのである。

「カーニヴァルの言語」によって野性人の祝祭的身体を活力と魅力に溢れたものとして提示したからこそ、祝祭の監視者＝カルヴィニストとしての自己のドグマを強化するための否定的反応が——ダンス反駁論という言説をとって——起こってきたとすれば、『旅行記』というテキストにおいて野性人の身体は、バフチンの言葉を借りればまさしくそこから自他の意識が生じてくる「言語の境界」であり、「緊張せる相互方向標定と戦いの地点」を形成しているのである。

3. 結び——今後の課題

複数の文化的要素の「混合物」であるレリの多声的なテキストは、バフチンがルネサンスのリアリズムについて指摘したように、「相矛盾した認知の仕方が不整合になっている」テキストである。この不整合を、本論文では「カルヴァンの言語＝身体観」と「ラブレーの言語＝身体観」との闘争という、対極的な規範の二項対立図式に沿うかたちで整理して提示した。これについて今後の研究に向けて二点補足し、以って結びとしたい。

第一に、本論文は、両者の関係を前者の後者に対する単純な勝利と支配の過程として論じることとはしなかったつもりである。というのも、二つの異質な言語の関係は実際のところ多分に相補的なものだと考えるからだ。つまり、一方は他方を生み出し、あるいは必要としているときえい

えるのではないか。上に見たように、『旅行記』においては、他者の祝祭的身体の陽気なイメージが強まるほどに教条的な言説が登場し、カルヴィニストとしての自己の立場が更に強化されるというパターンが見出せる。また逆に、他者のグロテスクな身体イメージは、カルヴィニストの観念的な自己イメージの形成過程で生み出された影の像といえるかもしれない。この点について現時点でのまとめとして、再びバフチンの言葉を引いておきたい。彼は「本論の課題にとって何よりも重要なのは、純粋な表現状態における両規範の本質的な差異である」とした上で、次のように述べていた。

しかし生きた歴史的現実にあつては、これらの規範・型は（古典的規範も含めて）決して凝固した不変のものではなく、絶えざる発展の中にあつて、古典的、グロテスク的なもの様々な歴史の変種を生み出して来た。それと共に、この二つの規範の間には通例、様々な形の相互作用——抗争、相互的影響、異種交配、転位——があつた。⁽⁴⁸⁾

バフチンが示唆する「様々な歴史の変種」「様々な形の相互作用」を、「生きた歴史的現実」の中でさらに追求していく必要があるだろう。

第二に、本論文はラブレールの言語（カーニヴァルの言語）に「カルヴィニズム」の言語を対置したわけだが、『旅行記』にみられたラブレールの言語による「野性」の形象は、やはり「西欧近代」の形成という歴史的文脈につながっていると思われる。ロベール・ミュシャンブレッドによれば、フランスでは16世紀中頃から17世紀にかけて、知識人文化と民衆文化との間に新しい差異が創出された⁽⁴⁹⁾。それ以前には貴族や聖職者と民衆の間にそれほど大きな感性や行動様式の差異はなかったのである。溝は16世紀中頃に穿たれ始め、啓蒙の時代にかけて二つの心性世界の断絶を深めていった。すなわち、カーニヴァルの放縦を忌避する「近代人」の文化とその闇としての「野蛮人」の文化の二重の創出が行われたのである⁽⁵⁰⁾。

本論文との関わりで示唆に富むのは、ラブレールを含む16世紀の物語作家（conteur）たちが、この時代に初めて大量に「書き」とめられた文化的交雑現象の表現者であったという指摘である。そして彼らが、都市文化と農村文化との「文化的仲介者」であると同時に、両文化間の境界画定にも一役買ったということ、「民族学のはるかな源流とも言うべき視線、つまり対象から距離を置いた視線の創造者ともなった⁽⁵¹⁾」ということである。『旅行記』研究の古典というべきミシェル・ド・セルトーの論考も、レリの他者経験を文明の道具たる「書き言葉（écriture）」と未開の「口承性（oralité）」との相互規定的な文化的遭遇として捉え、『旅行記』にその後の民族学において反復される原光景を見出すものであった⁽⁵²⁾。

ただし、「聖書Écritureのキリスト教」が未開世界の口承的伝統と保つ関係を扱っているものとしてレリの『旅行記』を読み、そこから近代西欧とその他者との二重の創出を論じるセルトーも、17世紀に本格化していく心性の差異化（近代人／野蛮人の創出）の原動力を、絶対王政のイデオロギーと並べてトリエント公会議以降のカトリックの布教活動に認めるミュシャンブレッドも、ともにプロテスタントとカトリックの比較という視点、あるいは諸宗派の相違という視点を欠く⁽⁵³⁾。少なくとも、近代の「野性」イメージをめぐる自己と他者の錯綜する関係について、より神学や信仰の問題に引きつけた個別研究を行う余地が残されていると思われる。

註

- (1) レヴィ＝ストロースは、『悲しき熱帯』の中でレリを近代民族学の起源に位置づけ、『ブラジル旅行記』を「民族学者の聖務日課書 (bréviaire d'ethnologie)」と呼んだ (Lévi-Strauss, Claude, *Tristes Tropiques*, Paris : Plon, 1955, p. 89.)。ジュネーヴ図書館 (1559年カルヴァンによって設立される) の当時の目録を調査したアラン・デュフルもまた「レリはおそらくその名に値する最初の民族誌家である」と述べている。Cf. Dufour, Alain, « Quand les gevevois commencerent-ils à s'intéresser à ethnographie ? », in *Mélanges Pittard*, 1957, pp. 141-149.
- (2) ジェラルド・ナカムによる唯一の校訂本が存在する。Cf. Léry, Jean de, *Histoire mémorable du Siège de Sancerre, 1573 : Au lendemain de la Saint-Barthélemy*, présentation, édition et notes de Géralde Nakam, Genève : Slatkine Peprints, 1975, pp. 171-361. 以下、『サンセール』からの引用の表記は [HMS: 原文ページ数] とする。
- (3) 本論で参照したテキストはフランク・レストランガンによる異文付き校訂本である。Cf. Léry, Jean de, *Histoire d'un voyage fait en la terre du Bresil*, text établi, présenté et annoté par Frank Lestringant, précédé d'un entretien avec Claude Lévi-Strauss, Paris : L.G.F. Le Livre de Poche, 1994. このテキストは1580年出版の第二版を底本としているが、レストランガンは考証資料として諸版の異文・図版を収録し、数ある校訂本の中でも最も詳細な注解を施している。引用の邦訳は、第二版を底本としてほぼ全文を訳出した二宮敬のものに拠った。Cf. レリ, ジャン・ド, 『ブラジル旅行記』二宮敬訳・注『フランスとアメリカ大陸Ⅱ』大航海時代叢書20, 東京: 岩波書店, 1987, pp. 19-365. なお, ごく一部だが訳に手を加えた箇所があることをことわっておく (注4も参照のこと)。以下、『旅行記』からの引用の表記は [HV: 原文ページ数; 邦訳ページ数] とする。
- (4) “Sauvage”をどう訳すかは厄介な問題である。「野性人 (野生人)」の他に「未開人」「野蛮人」など諸々の可能性が考えられる。二宮訳は「未開人」としているが、この時代に「進歩」の観念があったかどうかということは、それ自体問われなければならない問題であろう。また、レリは別に「ブラジルの地なるあの野蛮な部族 (nations barbares)」 [HV: 375; 235] という表現を用いていることなどから、本論では「野性人」をあてた。
- (5) Cf. Lestringant, Frank, “The Philosopher's Breviary: Jean de Léry in the Enlightenment,” *Representations* 33, 1991, pp. 200-211; *L'Expérience huguenote au Nouveau Monde*, Genève: Droz, 1996, Épilogue I, pp. 347-361.
- (6) バフチン, ミハイル, 『フランソワ・ラブレーの作品と中世・ルネサンスの民衆文化』川端香男里訳, せりか書房, 1985, p. 118.
- (7) レリの伝記については『ブラジル旅行記』の諸版に付された解説や注釈を参照。ただし, 最も詳しいのは次のものである。Nakam, Géralde, « Présentation », in Jean de Léry, *Histoire mémorable du Siège de Sancerre*, pp. 3-139 (esp. pp. 5-40). また補足として, Lestringant, Frank, *Le Huguenot et le Sauvage : L'Amérique et la controverse coloniale en France, au temps des Guerre de Religion*, Paris : Aux Amateurs de livres, diffusion Klincksieck, 1990, pp. 47-81. も参照。
- (8) Villegagnon, Nicolas Durand de (1510?-1571). マルタ騎士修道団で軍事と航海術を学び, 対スペイン

戦争で手柄を立てフランス副提督となる。ブラジルにおける最初のユグノ植民地建設を指揮したが、カルヴァン派移民団を迫害するに及び、植民地経営に失敗して59年に帰国した後はユグノの迫害に余年を費やした。

- (9) 16世紀前半から、フランス人とトゥピナンバウ族はポルトガル人を共通の敵として友好関係にあった。
- (10) Coligny, Gaspard de (1519-1572). 軍人にしてユグノの指導者。フランス大提督として宗教政策への影響力を発揮、ユグノに対する寛容政策を訴え、新旧両教の調停に努めた。ヴィルガニオンと共に新大陸へのユグノ植民地建設を計画した。
- (11) フランス語初版の翌年1575年にオランダ語訳が、翌々年1576年にはラテン語訳が出版された。
- (12) この間の事情については『ブラジル旅行記』の序文冒頭に詳しい説明がある [HV: 61-62; 25-26]。
- (13) 『ブラジル旅行記』はレリ存命中に手が加えられたもので5版を数える。①初版1578年、②増補第二版1580年、③増補第三版1585年、④増補第四版1599年、⑤増補第五版1611年。また1586年と94年にラテン語訳が、1593年にドイツ語訳、1597年オランダ語訳が出版されている。Cf. Lestringant, Frank, « L'Excursion brésilienne : Note sur les trois premières éditions de l'*Histoire d'un voyage de Jean de Léry* », in *Mélanges sur la littérature de la Renaissance à la mémoire de V.-L. Saulnier*, Geveva : Droz, 1984, pp. 53-72. レリの死後は1642年、1677年に新版が出たが、それ以降長い間刊行されることがなかった。19世紀末から20世紀後半にかけて抄訳・現代語訳を含むいくつかの版が刊行されている。Cf. 二宮敬, 「解題 ブラジル旅行記」『ブラジル旅行記』, 1987, pp. 10-12.
- (14) 『サンセール』の校訂者ジェラルド・ナカムは、レリにユマニズム的な「公平の精神」を見出して次のように述べる。「彼の物語の中には、カルヴィニズムのペシミズムも、魔女の存在を信じるそぶりも、暴力への嗜好も、手工業への軽蔑も、反セム主義も、いかなる種類の差別も認められない」(Nakam, « Présentation », 1975, p. 125.)。レリの心性を過度に近代的個人に近づけるナカムの主張は、レリを近代の民族学者の先駆として讃えたレヴィ＝ストロースの延長線上にあると思われる。またエラスムス研究者であった二宮敬のレリ理解もナカムに近いといえる。二宮は『サンセール』について「おそらくフランス・ルネサンスが遺した最も劇的な、最も胸を衝つ戦争の記録」と評する(二宮敬, 「解題 ブラジル旅行記」, 1987, p. 10.)。
- (15) ミシェル・ジャンヌレは、皮肉にも神の超越性と人間の本来的墮落を強調するカルヴィニズムの峻厳なドグマが、神との断絶や救いの不確かさにおける人間の平等を可能にしたという。Cf. Jeanneret, Michel, « Léry et Thevet : comment parler d'un monde nouveau ? », in *Mélanges à la mémoire de Franco Simone, tome IV : Tradition et originalité dans la création littéraire*, Genève : Slatkine, 1983, pp. 227-245.
- (16) Lestringant, Frank, « Préface : Léry ou le rire de l'Indien », in Jean de Léry, *Histoire d'un voyage fait en la terre du Brésil*, 1994, pp. 15-39; « Rabelais, le vin et le voyage, du *Quart Livre* au Brésil de Thevet et Léry », in *Rabelais-Dionysos : Vin, Carnaval, Ivresse. Actes du Colloque de Montpellier, 26-28 mai, 1994*, Marseille : Editions Jeanne Laffitte, 1997, pp. 51-61; Jean de Léry ou *L'Invention du Sauvage : essai sur l'« Histoire d'un voyage fait en la terre du Brésil »*, Paris : Honoré Champion Éditeur, 1999, Chapitre VII, pp. 161-169. 本論文は、基本的な理解の前提において一定の距離を保ちつつも、レストランガンの一連の学識豊かな研究から多くの示唆を受けていることを記しておく。

- (17) レリに関するレストランガンの最初期の論考によれば、全く異教的で改宗不可能な存在である裸の食人種社会を目の当たりにしたカルヴィニスト・レリは、「われわれ」と「かれら」との本質的な差異を認識するとともに、自分たちに約束された救いの排他的な特権を自覚化したのだという。Cf. Lestringant, Frank, « Calvinistes et cannibales: Les Ecrits protestants sur le Brésil français (1555-1560) », *Société de l'histoire du protestantisme français, Bulletin historique et littéraire* 126, 1980, pp. 9-26, 167-192. この結論は、1999年に出版された彼の総括的なレリ論集の序文にある次の結論にそのままつながっている。「レリのまなざしは、結局のところ、峻厳さと悲痛なペシミズムを帯びている…レリの相対主義的な考え方は、その背後に原罪とその仮借無き結果への不安におののく意識をもち、義なるも恐ろしい最後の審判を、越えられない地平として抱え込んでいるのである」(Lestringant, *Jean de Léry ou L'Invention du Sauvage*, 1999, pp. 22-23.)。
- (18) レリとラブレーの関係を取り上げたレストランガンの一連の論考(注16を参照)。また『旅行記』の英訳者であるジャネット・ファトリーは、レリの「語り口」がラブレーのそれと調子を同じくしていると指摘している(Whatley, Janet, “Food and the Limits of Civility: The Testimony of Jean de Léry,” *Sixteenth Century Journal* 15(4), 1984, pp. 393-394, note 8.)。ファトリーは『サンセール』における記述にもラブレー的な「語り口」を見出している。さらにまた彼女は、ユグノ的な視点と身体的な悦びの間に働く「引力」という言葉を用いて、レリのテキストにみられる緊張関係に言及している(Whatley, Janet, “Une révérence réciproque: Huguenot Writing on the New World,” *University of Toronto Quarterly* 57,2 (Winter), 1987-88, p. 283.)。
- (19) Morisot, Jean-Claude, « Présentation », in Jean de Léry, *Histoire d'un voyage fait en la terre du Bresil*, Genève : Droz, 1975, p. XXX.
- (20) アウエルバッハ, エーリッヒ, 「パンタグリユエルの口中の世界」『ミメーシス : ヨーロッパ文学における現実描写』下, 篠田一士・川村二郎訳, 東京 : 筑摩書房, 1994, p. 39.
- (21) Morisot, « Présentation », 1975, p. IX.
- (22) Ibid., p. IX.
- (23) Ibid., p. XXXVI.
- (24) バフチン, 『フランソワ・ラブレーの作品と中世・ルネサンスの民衆文化』, 1985, p. 28.
- (25) 同書, p. 412. 強調原文。
- (26) 同書, p. 308. バフチンによれば、ラブレーは「^{アグラスト}苦虫族」を何よりも憎んだ。それは「笑うことができず、笑いに敵意をもつ人間」, その振る舞いに「鈍な、悪意のこもった敬虔な厳肅性」が現われているような人間を指す(同書, p. 234.)。
- (27) レリの引用は、『第二之書パンタグリユエル物語』第14章「いかにしてパニユルジュがトルコ人の手から逃れ出たかを物語ること」から(ラブレー, フランソワ, 『第二之書パンタグリユエル物語』渡辺一夫訳, 東京 : 岩波書店, 1973, pp. 108-117.)。なお『第二之書』の初版は1532年である。
- (28) レリ, 『ブラジル旅行記』, 1987, p. 358 (二宮注4)。
- (29) Cf. フェーブル, リュシアン, 『ラブレーの宗教 : 16世紀における不信仰の問題』高橋薫訳, 東京 : 法政大学出版局, 2003.
- (30) カルヴァンとラブレーの関係については、渡辺一夫, 『ラブレー研究覚書』東京 : 白水社, 1949, pp. 33-54. を参照。1555年10月16日に行われた「申命記第13章に関する説教」でカルヴァンは、「パン

タグリユエルという悪魔」の生みの親として、すでに世を去っていたラブレールを罵倒することさえしている。

- (31) Diogenes (?-前323). ギリシアの哲学者、キニク(犬儒)学派の一人。乞食のような簡素な生活を送り、「樽の中の哲人」として有名。
- (32) この箇所については、『第四之書パンタグリユエル物語』第18章「パンタグリユエルが海上で大暴風雨から逃れたこと」を参照(ラブレール, フランソワ, 『第四之書パンタグリユエル物語』渡辺一夫訳, 東京: 岩波書店, 1974, pp. 123-126.)。なお『第四之書』の初版は1552年である。
- (33) 二宮敬は「ラブレール主義者 (les Rabelistes)」という造語について「他ではあまり見たことがない」と記している(レリ, 『ブラジル旅行記』, 1987, p. 364 (二宮注7.)。)
- (34) ラブレールに対するカルヴァンの攻撃は、その思想のみならず文体にも向けられていた。ラザールによれば、カルヴァンはラブレールの文体の「空しさと、秩序と明晰さの欠如」を非難したという(ラザール, マドレーヌ, 『ラブレールとルネサンス』篠田勝英・宮下志朗訳, 東京: 白水社, 1981, p. 145.)。
- (35) 二宮敬は、『旅行記』を翻訳するに際し1580年の第二版を選んだ理由を次のように述べている。1585年第三版以降の補筆の内容は、ルネサンスの著述家にはほぼ普遍的にみられるギリシア・ローマの古典の引証と、レリの直前にブラジルに渡ったフランシスコ会士アンドレ・テヴェエやヴィルガニオンに対する批判に占められているが、「これらの補筆、とくに後者は、世紀末を挟む宗教論争の資料としては無視できないが、本来の旅行記という点から見るとあらずもがなの印象を拭えない」(二宮敬, 「解題 ブラジル旅行記」, 1987, p. 12.)。レリーは生前中絶え間なく『旅行記』への加筆を続けたが、この過程で『旅行記』は宗教論争の書としての性格を強めていった。なかでも第15章の末尾に起こった変化は特筆に価する。レリーは1585年の第三版以降「語るもおぞましい数々の振舞い」「地獄も震撼する振舞い」についての記述を大幅に増加させ、ついには原文で20ページ以上に及ぶ新章を設けるに至った。この新章は、トルコ人、フランス人、そしてスペイン人の残虐さを、カニバリズムを中心に、強迫観念的とも言うべき執拗さで連ねている。そしてそれはカトリック教徒に対する仮借なき批判に集約されていくのである [HV: 571-595 (Appendice I)]。
- (36) 二宮訳はこうしたニュアンスを十二分に酌んでいると言うべきである。
- (37) 「さらに私の話を続けることにすると、こんな具合にしてこの大酒盛りカウイナージュが続く限り、わがアメリカの暢気連飲兵衛諸君は、いやが上にも景気をつけようと、歌ったり口笛を吹いたり、お互いにいざ合戦となったら勇敢に戦おう、また捕虜を大勢捕らえようと励ましあいながら、まるで鶴みたいに整列し、集まって来た家の真中を行ったり来たり、限りもなく踊り続ける。つまり、甕に何がしか残っていると知っている限りは、先に述べたように絶対に止めようとしなないのだ」[HV: 251; 154]。
- (38) [HV: 226-227, 227-228; 135, 137-138] この箇所についてアンソニー・パグデンは次のように述べている。「ヨーロッパの衣服で飾り立てられ、ヨーロッパの習慣をまねさせられたインディオは、ヨーロッパのカーニヴァルから借りられてきた形象にすぎぬものとなる」(Pagden, Anthony, *European Encounters with the New World: From Renaissance to Romanticism*, New Heaven; London: Yale University Press, 1993, p. 44.)。
- (39) 教会や聖礼典による救いを否定したカルヴァン神学の特徴は、宗教における霊的なものと肉的なものを厳密に区別したことに認められる。Cf. Eire, Carlos M. N., *War Against the Idols: The Reformation of Worship from Erasmus to Calvin*, Cambridge; New York: Cambridge University Press,

1986, pp. 195-233. それは、霊的な「純粹さ」を肉的なものの混淆によって「汚染」する「偶像崇拜」として、ミサをはじめとするカトリックの儀礼体系を社会生活から排除しようとした。レリはこのカルヴァン神学の忠実な継承者だった。『サンセール』の第3章では、カトリック教徒が改革派信徒に加えた虐殺、略奪、凌辱などの悪行を列挙した上、最後に「あらゆる悪行の中でも最悪のもの」として、ミサや「偶像崇拜」に改革派町民が強制的に参加させられたことが挙げられている〔HMS: 210〕。また落城後のサンセール市内の惨状について記された最終章（第14章）でも、物的な財産の破壊以上に「偶像崇拜や教皇の迷信の数々」の復活が真に嘆くべき「霊的な財産」の略奪として挙げられている〔HMS: 342〕。さらに、公現祭・謝肉祭・四旬節・聖遺物崇敬・洗足式など、民衆の生活世界に根ざしていたカトリックの儀礼的祝祭的文化が逐一痛烈に「諷刺」されていることも見逃せない〔HMS: 239, 252-253, 263-264〕。

- (40) 後述するランベール・ダノ『ダンス反駁論』を含め、ユグノのダンス反駁論のいくつかがまとめられている文献として、Garrisson-Estebe, Janine, *Protestants du Midi 1559-1598*, Toulouse: Privat, 1980, pp. 300-305.を参照。
- (41) フィジャックの教会会議でなされた決議の第23項にはこうある。「ダンスに関しては、牧師会および長老会ではできるだけ厳重に、ダンスを禁じた条項を遵守しなければならない。そして、この神聖なる勧告に背き続ける者たちと、態度の改善を示し、いかなるダンスも禁じた戒告に慎み深く従ってこれを益とする者たちを注意深く識別しなければならない」(Haag, Eug. et Em. Haag éd., *La France protestante, ou, Vies des protestants français, ouvrage précédé d'une notice historique sur le protestantisme en France, suivi de pièces justificatives* (10vols). Genève : Slatkine Reprints, Pièces Justificatives, 1966, p.169.)。ラ・ロシエルの教会会議の決議第12項では、この第23項が十分に実行されるべきこと、広く衆目に知らしめられるべきことが再確認され、さらに義務の不履行に対して懲罰を加えることの必要が確認されている (Ibid., p. 179.)。
- (42) レリ, 『ブラジル旅行記』, 1987, p. 354 (二宮注6)。
- (43) レリが参照している本は『世界第三の地アフリカについての歴史記述』。Léon, Jean, *Historiale description de l'Afrique, tierce partie du monde*, trad. par Jean Temporal d'après les Navigations et Viages de G. B. Ramusio. Lyon : J. Temporal, 1556. [HV: 253, note4]
- (44) Daneau, Lambert (1530-1595). 同時代の正統カルヴァン派神学の最も鋭敏で知的な論争家といわれる。牧師としてレリとともにサンセールでの籠城を経験した。また『旅行記』に寄せられたソネットのうち露払いを務めているのはダノのものである [HV: 51]。
- (45) Daneau, Lambert, *Traité des danses, auquel est amplement resolué la question, asavoir s'il est permis aux Chrestiens de danser*, Seconde edition, s.l., 1580, p.32 (Cité in Lestringant, *Jean de Léry ou L'Invention du Sauvage*, 1999, p.135)。
- (46) Ibid., p.33 (ibid., p. 137)。
- (47) Ibid., pp. 64-65 (ibid., p. 137)。
- (48) バフチン, 『フランソワ・ラブレーの作品と中世・ルネサンスの民衆文化』, 1985, p. 33.
- (49) Cf. ミュシャンプレド, ロベール, 『近代人の誕生 : フランス民衆社会と習俗の文明化』 石井洋二郎訳, 東京 : 筑摩書房, 1992. とくに第一章から第三章。
- (50) この問題をイギリス文学史・文化史において論じた重要文献として、ストリブラス, ピーター,

アロン・ホワイト、『境界侵犯：その詩学と政治学』本橋哲也訳，東京：ありな書房，1995. を挙げておく。

(51) ミュシャンブレッド、『近代人の誕生』，1992，p. 88.

(52) Cf. セルトー，ミシェル・ド，「民族=誌学 口承性，あるいは他者の空間——レリ」『歴史のエクリチュール』佐藤和生訳，東京：法政大学出版局，1996，pp. 232-271.

(53) 他者を前にしたカトリックとプロテスタントの知覚やイメージ形成の相違という問題への序論として，Whatley, Janet, “Savage Hierarchies: French Catholic Observers of the New World,” *Sixteenth Century Journal* 17, 1986, pp. 319-30; “Une révérence réciproque,” 1987-88, pp. 270-289. を参照。これらの論考にふれて，スティーブン・グリーンブラットも次のように言う。「カトリック教徒とプロテスタントは，異なった問いの立て方をして，異なったことに注目し，異なったイメージを成型する傾向にあった。その差異は，17世紀研究をしている者が，とりわけ『プロテスタント的詩学』という言い方を許すほどに大きく，もしわれわれがここで関心を寄せているそれ以前の時代に対してそうすることはより困難であるとしても，宗教改革の初めから区別立てをするだけの十分な理由が存在する」（グリーンブラット，スティーヴン，『驚異と占有：新世界の驚き』荒木正純訳，東京：みすず書房，1994，p. 12.）。

A Good Calvinist's Rabelais: “Savage Body” and the “Language of Carnival”

Yu WATANABE

Early modern French seemed to draw some distinctions between the Self and the Other or the invention of them through the Reformation, the advance on the “New World,” and the transformation of popular mentality problematized as a “civilization of folkways”. Jean de Léry (1534-1613) is a French thinker who lived as a Calvinist and a pioneer “ethnographer” in this transitioning period of Western Europe. This article deals with his chief book *History of a Voyage to the Land of Brazil* (1578, the first edition). Addressing the language and its style representing the “savage body”, it discusses the complicated relationship between the Self as a “Calvinist” and the Other.

After outlining basic features of his work, the paper discusses different interpretations of Léry which are mutually exclusive. Harking back to the text itself I indicate what may have resulted in such contradictory views. Here our discussion leads to M. Bakhtin's theory of the Carnival and a consideration of language-culture in the Renaissance.

Furthermore, we pick out from two poles the source of system of languages and images which Léry adopts for “writing” his own experience of the Other. One is the dogma founded by Jean Calvin (Calvinism); the other is the “language of Carnival” identified by Bakhtin in the work of François Rabelais.